「下村満子の生き方塾」ニュース vol.23 2021.05

―12月勉強会&1月寒中接心合併号―

コロナ対策講じ 1年を振り返る

――――鳩山会館で忘年会

「下村満子の生き方塾」は2020年12月20日、コロナ対策を十分講じ、東京・音羽の鳩山会館で、塾生はじめオブザーバー、応援団が集まり、12月忘年勉強会を開きました。応援団講義は、元「盛和塾」塾長で京セラ名誉会長の稲盛和夫氏の「なぜ経営に哲学が必要か」と題したDVDを上映しました。下村塾長は「コロナを、プラスにして生きる」と題して講話。鳩山会館のオーナーである元総理の鳩山友紀夫氏と幸夫人も出席し、鳩山さんは「脱原発で、2050年カーボンニュートラルの日本を実現する」「2021年の日本と世界～期待と予想」と題した二つの特別講演をしました。忘年パーティーは三密回避、徹底した消毒といったコロナ対策を講じた上で行い、2020年1年を振り返り、2021年を実り多き年にすることを誓いました。（文・構成／皆川猛）

稲盛さんのDVD上映 謙虚にして驕らず、さらに努力を

10分間坐禅、塾生五訓の唱和で開会し、初めに2人のオブザーバーを紹介しました。続いて下村塾長は、「あっという間の1年でした。コロナという想定外の世界を襲ったパンデミックにより、5か月間休塾を余儀なくされ、いろんなことを考えさせられた1年だったと思います。今日は鳩山会館という素晴らしい場所を、格安にお借りすることができました。パーティーはつつましく、しかし楽しくやりましょう」とあいさつしました。

● 誰にも負けない、懸命に働く

応援団講義は、京セラ名誉会長で元盛和塾塾長の稲盛和夫氏のDVD「なぜ経営に哲学が必要か」を見ました。上映に先立ち下村塾長は「稲盛さんのフィロソフィーと私の考え方は、ベースが同じなのです。タイトルは『なぜ経営に哲学が必要なのか』ですが、これはそっくり『人生になぜ哲学が必要なのか』と言い換えることができます。考えさせられる内容ですのでじっくり見てほしい」と、なぜ上映するかを説明しました。

DVDの要点は次の通りです。

- 会社経営と社長の心は、パラレルであり、哲学とは人生観であり、考え方でもあります。経営がうまくいっていないのは、トップの考え方が間違っているからです。
- 昔のことですが、ある人が私に「立派な会社になったのだから、そんなに働く必要はないでしょう」と言いました。しかし、楽したいと思ったら、会社、業績はそれ以上伸びません。その人の会社はそこそこの規模でしたが、それ以上伸びませんでした。
- これは人生にも当てはまります。たった一回の人生をどう生きるのか。懸命に生きるのか、適当に生きるのか。なぜ自分はそうしたいのか。

元「盛和塾」塾長の稲盛さんのDVDを見る

- 会社経営をよくするのに必要な哲学とは、何でしょうか。27歳で従業員28人の京セラを創業しましたが、経営判断は全て自分でやるしかなかった。その時、私を支えてくれたのは、嘘はつかない、悪いことはしない、欲張らないなど、人間として守らなければならない基本的な倫理観でした。それらは昔から守られているフィロソフィーです。これらを経営フィロソフィーのベースにしたことが、京セラの成功につながりました。
- 起業した経営者は「誰にも負けない努力」をしなければなりません。創業当時は、先行きに対する恐怖心が絶えず、それを克服するには人一倍の努力しかない、と考えました。それは決して間違っていませんでした。「一生懸命に働く」。これ以上の経営のノウハウはありません。JALの再生も、この気持ちで、無報酬で行いました。

成田さん

園部さん

佐藤さん

飯島さん

北川さん

濵田さん

- 起業して成功したら、「土俵の真ん中で勝負する」。一時的な成功で淘汰され、消滅した企業は全て、上滑りした経営をしていました。小心くらいの着実な経営、堅実な経営でないと、企業は生き残れないものです。
- 昭和34年、資本金300万円、従業員28人でスタートした京セラは、半世紀後には売上1兆5千億円、全世界で従業員7万5千人の企業に成長しました。会社をつぶしてはならない、借金しない会社にしたいという強い思いがあったからです。
- ニクソンショック、オイルショック、バブル崩壊など、様々な経済危機変動の荒波を体験しましたが、通期では一度も赤字決算をしたことはありませんでした。
- しかし、小心だけでは経営は駄目です。時には大胆さも必要で、この相反する二つの心を持っていなければなりません。この両極端を兼ね備え、使い分けることが大事なことです。変化を恐れて、現状に満足し、旧来のやり方に固執していたのでは、経営はやっていけなくなります。新しい事業展開を恐れない、易きに流されない企業風土を創るわけです。
- 人間の無限の可能性を信じる。人間の能力は、挑戦すれば無限に広がります。今の能力だけで判断したら駄目になるのです。創業からしばらくは、ないない尽くしの小さな会社で、現有の技術・能力ではとてもこなせないような難しい仕事でも受注し、どうしたら仕上げられるかに全員で取り組みました。この結果、発注者を満足させる仕事を新規開拓できるようになったのです。つまり、不可能に挑戦する。能力を未来進行形にする努力をするということです。
- これを整理するとこうなります。楽観的に構想を練り、悲観的に緻密に計画づくりをする。そして楽観的に実行する。優秀な者ほど色々と考えるので、新しい試みに冷淡なのです。構想を練る時は、楽観的に考える一本足りないような者にやらせ、計画づくりは優秀な者に、実行するときは陽気な者にやらせます。第二電電を立ち上げた時は、この人物登用策で行い、成功しました。
- 絶好調な時ほど、「謙虚にして驕らず。さらに努力を」の言葉を忘れてはなりません。戦後の企業の興亡を見ると、経営者が慢心すれば企業は傾きます。JAL再生に要した3年間は、誰にも負けない努力をしたつもりです。再生に成功したわけですが、ここで気を緩めてはなりません。さらに努力しなければ、それまでの努力が無駄になってしまいます。未来は、これからの努力にかかっているのです。現状がいいのは、これまでの努力の結果であり、未来を保証したものではありません。
- 心を高める努力も、忘れてはなりません。そうありたい、と努力し続けることが大切です。戒律をすべて守ることはできません。だから毎日、人間として正しく行動できたか、その日一日を振り返り、反省しなければなりません。常に反省のある日々を送るのです。
- 経営者として人をひきつける魅力を備え、尊敬される人格を形成できれば、必ず従業員はついてきます。繰り返しになりますが、経営者の心のレベル以上に、会社は成長しません。社員の物心両面の幸せ実現のために、努力してください。

● ソウルメイトがいてよかった

稲盛さんのDVD上映の後、稲盛フィロソフィーを長年にわたり学び、実践している成田仁孝、園部洋士、佐藤順英、飯島充実、北川直樹、濵田総一郎さんの6人の塾生が、稲盛フィロソフィーについて一言、感想を語りました。

成田さん：「すし店を経営しています。いつ聞いても、稲盛さんの言葉は、心にしみるものばかりで、すごいなと感じています。もし稲盛さんと出会わなかったら、会社は倒産していただろうし、家庭も崩壊していたと思います。『人間として何が正しいか』を判断の基軸としたからこそ、道を外しませんでした。コロナ禍で外食産業は大変ですが、『誰にも負けない努力』『ピンチはチャンス』を胸に刻み、新たなステージの経営を目指しています。

解散はしましたが、『盛和塾』は何が素晴らしかったか。一つ目は、人生最高の師から直接指導を受けられたことです。二つ目は、共に学ぶ仲間、ソウルメイトがいたことです。『盛

和塾』に出会って間もなくのころ、下村さんのお父さんがやっていた鎌倉の禅堂に行きましたが、その時接してくれたのは、お母さんでした。優しい言葉をかけてもらい、坐禅するようになりました。坐禅によって、軸はぶれなくなり、日々反省のある日を送れるようになりました。三つめは、京セラフィロソフィーを学び、生き方が変わりました。特に、『人生の方程式』には感銘を受けました。フィロソフィーを持つことが大事だと考えています」

園部さん：「弁護士の仕事をしていると、稲盛フィロソフィーは、何事にも的を射ていると感じます。『人間として何が正しいか』を行動の基準とすることは、実は『言うは易く、行うは難し』なのです。しかし、行動の基準を忘れてはなりません。不正に手を染めるには、動機、環境、正当化する心、というトライアングルがあり、ちょっとしたことが引き金になって、普通の人でも罪を犯してしまいます。

京セラフィロソフィーは、こうした人間の弱さを知った上で、素晴らしい人生を送るために構成されています。『全従業員の物心両面の幸せを図る』ためには、フィロソフィーをしっかり学ばなければなりません。実践は大変ですが、生き方を振り返り、反省を気づかされる。私は判断に迷ったら、フィロソフィーを読むことにしています」

佐藤さん：「エイブル社は、2011年大震災によって原発が壊れてからは、廃炉作業に従事しています。この作業は、放射線との闘いでもあることから、従業員の健康を守るために、新たな職場として、環境に配慮したバイオマス発電所を作っています。きっかけは、この構想を稲盛さんに相談したところ、『大いにやってくれ』と励まされたことにあります。10億円の売り上げしかないのに、奇跡の連続で、650億円をみずほ銀行から融資を受けました。発電所は2022年から稼働します。

直近のエイブル社の仕事を挙げるなら、第一原発の120㍍の排気筒切断があります。大手は難しいからと断り、自社ができるとは思いませんでしたが、稲盛さんの『不可能に挑戦する』の言葉を思い出し、引き受けました。ロボットを開発し、切断に成功し、この技術は世界で認められ、表彰を受けました。『できると確信すればできる』。あらためて稲盛フィロソフィーの偉大さを実感しました」

飯島さん：「ゲームセンターのUFOキャッチャーの景品作りやキャラクター商品の企画販売をしていますが、『盛和塾』での稲盛さんの言葉は、誰にでもわかる言葉で、一言一句ストンと腑に落ちます。特に『全従業員の物心両面の幸せを考える』、を肝に銘じて経営にあたっています。フィロソフィーには学ぶことがたくさんありますが、『生き方塾』で稲盛さんのDVDを見て勉強できるのは、いいことです。『誰にも負けない努力をずっとやり続ければ、誰でも成功する』『謙虚にして驕らず』『土俵の真ん中で勝負する』『生きていることに感謝する』『感性的な悩みはしない』『利他』など、稲盛さんからいろんな言葉をもらったから、30数年も仕事ができている、と思っています」

会場・鳩山会館の冬の庭園

北川さん：「クラシック時計、アンティック時計のレストアをしています。来期からは月に一度、『生き方塾』で、『稲盛さんのDVDを見る会』という分科会の幹事を引き受けましたが、今回DVDを見て、人とのご縁の大事さを学びました。

緊急事態の発令によって、売り上げは半減しましたが、空き時間ができたので、10人の仲間と、あらためて、DVDや著作で稲盛フィロソフィーを学びました。

コロナ禍で苦しい環境に置かれているだけに、稲盛さんの話は全て、すんなり入ってくるのです。『もう駄目だと思ったところから、仕事は始まる』。勉強して言葉では分かっても、実践は難しいと思います。一緒に稲盛フィロソフィーを学びましょう」

濵田さん：「久しぶりに元気な稲盛さんの謦咳に接し、フィロソフィーがいかに自分の宝になっているかを再認識しました。人生では三つの大事があります。一つ目は、正しい師に会うこと。二つ目は、『古来聞き難きは、道なり』ということ。この言葉の後には『天下得難きは、同志なり』という言葉が続きます。道とは人間として歩むべき道で、志を同じくする仲間はなかなか得難いという意味です。三つめは『正しい道を訊く』。いい指導者と出会い、志を同じくする仲間と正しい道をさぐりながら、歩みを進める。

稲盛さんは、真我の重要性を強調しています。心を磨いて心を高め、その磨き抜かれた心の中心で、物事を判断すれば、間違いはない、とおっしゃっています。人はなぜ悩むのか。それは真我に気づいていないからでしょう」

塾長講話　変化・変革に対応できる女性

● すべてに通じる稲盛哲学

稲盛フィロソフィーについての体験発表の後、下村塾長は「コロナを、プラスにして生きる」と題し、次のように講話をしました。

「『誰にも負けない努力』など、聞けば聞くほど、稲盛フィロソフィーは、経営者ばかりでなく、コロナ禍で苦しんでいる私たちをはじめ、全ての人に通用するフィロソフィーです。『生き方塾をやろうと思っているのですが』と稲盛塾長にご相談した際、稲盛さんは『いいことだ』と了承して、その場で応援団になって下さいました。稲盛哲学のベースは、東洋的思想というか、仏教的な発想であり、それは私と共通しているものです。稲盛さんが手がけたJAL再生は、鳩山友紀夫元首相から頼まれて始まったものでした。フィロソフィーがあったからこそ、再生は成し遂げられたと思うのです。

コロナ収束の見通しは立たず、感染拡大は止まっておらず、

講話をする下村塾長

コロナウイルスは全国に拡散しています。『Go To』はもっと早くやめるべきだったのです。不要不急の外出はやめよ、と力説する一方で、税金を投じて旅行に行け、もっと外食せよ、と勧めるわけですから、矛盾も甚だしい政策です。『Go To』のお金を医療機関に配れば、もっと有効に使えるはずです。今年1年は、コロナで右往左往させられた1年でしたが、来年2021年もコロナ禍は続くでしょう。

コロナをどう捉えるのか。私はずっと、『これは天からのメッセージだ』と言い続けています。最近は、コロナをポジティブに捉え、社会を変化させるきっかけにしようとする動きが増えています。NHKのクローズアップ現代では、『社会を動かす！女性たちのライフスタイル・チェンジ』と題して、次のようなコンセプトを基に、例を挙げながら、特集番組を放送していました。

【クローズアップ現代から】コロナ禍で、従来の社会の仕組みや自らの生き方の問い直しが迫られる中、「ライフスタイル」を変え、社会を変革しようという新潮流が生まれている。キーワードは「持続可能性＝サステナビリティ」だ。40代の女性が責任者となり「丸井グループ」が進めているのは、大量生産・大量消費と決別した店作り。また、地方にはインバウンドに頼らず、地産地消で経済を回そうと動く女性も。本当の豊かさとは何か、女性たちの新たな挑戦を見つめる。

―この一例として、化石燃料の使用量を減らすため、薪ストーブを使うものもあります。薪は放置されている間伐材を使います。全世界では、コロナによって経済活動が鈍り、結果温室効果ガスの排出量が減って、空気がきれいになっている、との報告もあります。環境への負荷が減ることは、SDGSの理念にもかなったものです。みんなの幸せを図ればやがて、それは自分に返ってくる。これまで日本は、目先の利益ばかりを追求してきましたが、女性中心の経済活動は、持続可能性を追求した経営転換へと方向を変えています。未来を見据えて、何をすべきかを考える。コロナは、既成概念にとらわれる男性のやりかたに発想転換を迫るきっかけとなっています―

このDVDで見た通り、変化、変革に対し、柔軟に対応できるのは、女性です。原子力ムラに代表されるように、男性中心社会は、既得権益に縛られているから、身動きが取れません。その点、失うものが少ない女性は、身軽であり、次のステップに跳ぶことに抵抗はありません。どんなに大きな組織でも、一個人の集まりであり、一人一人が変われば全体が変わります。コロナは、チャレンジする機会を与えており、グローバリズムの弱点を明確にしました。本来、グローバリズムは、地球は人類共通の家という認識があった上で成り立つわけですが、現実は、資本主義とりわけ、金融資本が全世界を駆け回って、少しでも利益を得ようという動きの中でのグローバリズムでしかありません。

その意味で、コロナは、今の資本主義の在り方を考え直すべき時期にあることを示唆しています。コロナ時代に生き残っている企業に共通しているのは、①長期的な利益を考えている会社②株主中心主義ではなく、従業員、取り引き先、消費者など、関わっている全ての人々を大切にしている会社で、これらはいずれも、「従業員の物心両面の幸せを図る」という稲盛フィロソフィーの一面でもあります。

政治・経済の基本は、人間を幸せにするための社会活動であり、政治家や官僚は、何のために、誰のためにやっているのかをしっかり考えるべきなのです。社会や国は運命共同体です。国民を幸せにするため、人間として正しいことをするのが政治家をはじめ、リーダー達の役目です。コロナ禍の今、それが一番問われています」

鳩山親子特別講演　神話にだまされず、政治に参加を

● 政治本来の新党目指す

塾長講話に引き続いて、鳩山友紀夫元総理の長男・紀一郎さんが、飛び入りで講演しました。紀一郎さんは1976年生まれで、長岡技術科学大大学院の特任准教授。国政への参加を目指し、2020年6月、政治団体「日本先進会」を発足させました。短い時間でしたが、次のように話をしました。

―「思いやり」と「合理性」の政治を目指します。まず、今までの財務省主導の緊縮財政から脱却し、合理的な使い方を前提にした上で、積極財政を行います。価値を生み出す人を登用します。国が最低限のサービスとして提供する「健康、安全、教育」を保証し、三権分立という統治機構は見直します。目指すところは、政策本位の新しい政党をゼロから作るということです。詳しくは「先進会」立ち上げの際に書いた『「思いやり」と「合理性」の日本へ』を読んでください―

● 原発なしでも温暖化防げる

鳩山紀一郎さんの飛び入り講演に続いて、会場となった鳩山会館のオーナーで元首相の鳩山友紀夫さんが「2021年の日本と世界～予想と期待」と題して特別講演をしました。

鳩山さんはまず「脱原発で、2050年カーボンニュートラルの日本を実現する」を掲げて、日本のエネルギーの現状や脱炭素社会への道筋について、次のように話をしました。

● 菅首相は所信表明演説で、2050年までに温室効果ガス排出をゼロにする、カーボンニュートラルを目指すとしましたが、原発は、温存したままです。原発は稼働時には二酸化炭素は出しませんが、原発建設にあたっては、膨大な鉄、セメントを使いますから、決してクリーンエネルギーではあません。しかも可燃廃棄物は焼却処分しますから、ここでも大

鳩山紀一郎さん

鳩山友紀夫さん

量の、しかも放射能を帯びた二酸化炭素を出します。

- 私は、原発なしでのカーボンニュートラルを目指します。2019年の日本の二酸化炭素排出量は、11億2000万㌧で、18年の総発電量は1兆500億㌔㍗アワーでした。電源別内訳は、石炭、天然ガス、石油の化石燃料が66%を占め、発電の過程で石炭が排出する二酸化炭素量は5億㌧です。水力、太陽光、風力、地熱、バイオマスの自然エネルギーの総発電量に占める割合は18%に過ぎません。
- 日本は人口減少が進んでいます。2020年の1億2602万人は、50年には25%減の9515万人と予想され、50年の推定必要総発電量は25%減の7930億㌔㍗アワーです。この発電量は、化石燃料、原発を使わないで賄えます。内訳は、太陽光3500億、風力2000億、地熱500億、バイオマス1150億㌔㍗アワーです。太陽光の平均増加率は実績を下回り、しかも素材の改良が進んでいるから十分可能です。西欧で主流の風力は、秋田や北海道に適地が多く、洋上発電は風が強く、低周波騒音問題もなく有望。日本の地熱資源量は2340万㌔㍗を有し、ほとんどが未利用だから伸びしろは十分。バイオマスは、ごみ処理、糞尿処理、未利用木材処理などに併用され、社会貢献度が高い発電。この7年間で6倍も伸びており、今後30年では、厳しく見積もっても約4倍の発電能力を持ちます。
- 自然エネによる発電、人口減少、省エネ努力、運輸部門での化石燃料不使用などによって、現在11億2000万㌧発生している日本の二酸化炭素量は、1億6000万㌧が残余となる。しかし、この残余二酸化炭素は、二酸化炭素除去技術の開発、森林や海洋植物による吸収などで、ゼロにすることができます。

● 真実認め「未来」を志向

エネルギーに対する持論披露に引き続いて、鳩山さんは、本題の「2021年の日本と世界」について、次のように講演しました。

「日本には、いくつかの“神話”があります。それは、①地球温暖化対策には原発が必要だ、②日本はアメリカの核の傘にいるから安全だ、③日本は勤勉で高学歴社会である、④日本の食べ物は最も安全だ、⑤日本は経済が成長すれば、恩恵は上から下へと落ちてくる、などなど枚挙にいとまがありません。

しかし、それらはすべて根拠がないものです。例えば、原発の建設では、その素材から膨大な二酸化炭素が出、放射性廃棄物処理の際にも二酸化炭素を発生させています。

核の傘にいるから安全も、絵に描いた餅です。日米安保条約でも、日本が有事の際、アメリカは協力するとは書いていないし、日本の飛行機は日本の上空を自由に飛べません。日本上空は、アメリカにコントロールされています。米軍基地は、日本を守るためにあるのではなく、アジア、中東へ出撃する際、戦略上不可欠だからあるのです。

日本の大学進学率は61%で、世界32位、子どもの学力は、OECD36か国中最下位です。

食べ物の安全もウソです。食料自給率はたったの３８%。アメリカの要求で食品安全規制を緩和し続け、遺伝子組み換え作物の最大の輸入国です。モンサント社の除草剤ラウンドアップは発がん性農薬で、日本はアメリカに合わせて毒物成分の残留基準を大幅に緩和しています。

経済成長主義、新自由主義経済で貧富の差は拡大の一途です。

今必要なのは神話ではなく、真実を認め『未来』を志向することです。すなわち、日本を自然エネルギーの大国にして、日本の平和と安全は日本が責任を持つことです。日米安保の地位協定を改定し、常時駐留なき安保にする。一人一人の個性に合った学びができる教育環境を整備しなければなりません。35人学級では不十分で、欧米並みに20人学級にする。入試制度を改革し、学校の入り口は広く、出口は狭くするなどを行うべきです。実は、ゆとり教育時代の子どもたちの学力が、世界的にも高かったのです。

色々ありますが、要は、理想の政治を目指して責任ある者が皆で政治を支えること。有意の人々が共に和して、政治を支えるシステムを作ることです。自立した国民の参加によって形成される政治ですから、共和政治と言えるでしょう。それは「正義」、「美徳」、「卓越」、「友愛」を基準として政策決定されるはずです。

趣向を凝らして 忘年パーティ

この日の締めくくりは、忘年パーティー。白鳥、大野、諸富、篠原、氏家、北島さんら、東京の世話人が練り上げた多彩なプログラムが用意され、笑いあふれる中、あっという間に楽しい時間が経ちました。下村塾長に関わるクイズ、プロのマジシャンが目の前で行う手品、円福寺での接心を写したスライドの上映、2020年1年を回顧した塾生の感想、思いがこもったプレゼントの交換など、いつになく盛り上がったパーティーでした。

席上、この忘年パーティーまで3年間経理を担当した白鳥代表世話人に、感謝の記念品が下村塾長から贈られました。

塾生感想　「縁」の大事さを学んだ

○…稲盛塾長のフィロソフィーは、DVDの画面越しでも十分わかり、本を読むより心に深く刻まれました。元「盛和塾」のコアメンバーが話す稲盛フィロソフィーの実践体験を聞き、自分も頑張らなくては、とあらためて決意しました。

（氏家範昌）

○…昨年の忘年勉強会も鳩山会館で行われましたが、今年はコロナ禍のせいもあってか、例年よりさらに短い1年でした。稲盛さんの「誰にも負けない努力をして、1日を反省する」日々を送れば、思い通りの人生を送ることができるとは思いますが、そう簡単なことではないなあ、と思ってしまいます。自分の至らなさに気づき、毎月の勉強会で励まされています。

（常松景子）

○…2020年は誰にとっても忘れられない1年になりました。働き方、価値観、生活スタイル等は、否応なしに変えられ、今後の見通しもはっきりしません。そんな不安がぬぐえない中、今回の勉強会では「縁」の大事さを学びました。稲盛塾長のDVD、「盛和塾」の大先輩のスピーチ、下村塾長の講話、鳩山元総理のお話と、大変勉強になりました。

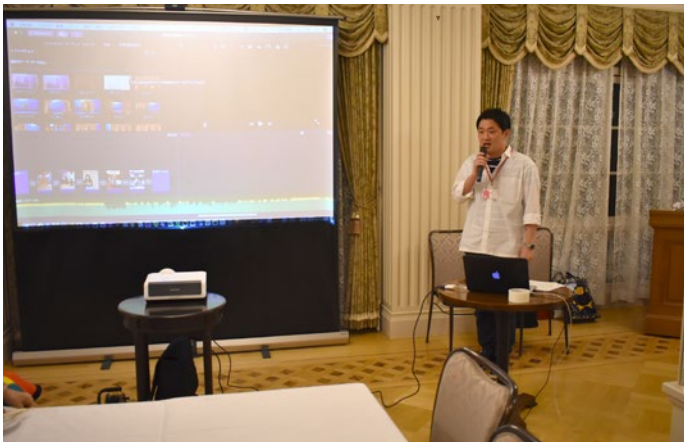
（北川直樹）

退任する白鳥さんに感謝の花束

長年、塾長秘書を務めた春日さん（中央）は幼児の世話をする仕事に就く

氏家さんの音頭で乾杯

塾長の朝日時代の仕事ぶりを画像で紹介された



塾長にまつわるクイズで会場は盛り上がる

コロナにめげずに16炷

――――二本松で寒中接心

「下村満子の生き方塾」は、2021年1月29～30日の2日間、福島県二本松市霞が城ふもとにある下村塾長の実家で「寒中接心」と銘打った坐禅合宿を行いました。幹事を務めたのは、氏家範昌、高橋宏史、北川直樹さんの3人です。コロナ感染に留意し、三密回避など、感染対策を徹底した今回の接心には、首都圏の塾生を中心に19人が参加し、時折雪が舞い散る厳寒の中、計16炷坐りました。ピーンと張りつめた雰囲気の下、「空」の世界を実感した塾生も少なくありませんでした。

（文・構成／皆川猛）

● 19人が心一つに

開会の挨拶をする下村塾長

初日29日は、二本松市の福島県男女共生センターに夕方集合してチェックイン。下村塾長が「二本松での寒中接心はこれまで何回も行っているが、今回はコロナ対策として、食事は弁当やおにぎり、と寂しいものです。しかし、こうした状況だからこそ、今回の接心は大きな意味があります。困難な状況にもかかわらず、多くの人が参加し、感激しています。しっかり坐って心を高め、免疫力を上げましょう！」とあいさつしました。

オリエンテーションの後、夕食をとり、下村邸で3炷坐りました。拍子木は濵田総一郎副塾長、点鐘は成田仁孝さんが担当し、2人の息の合った進行で、いつにない深い坐禅となりました。澄んだ空気の夜空には、参禅者を励ますように、月齢15・9の満月が浮かんでいました。

2日目30日は、午前4時半から早朝坐禅。この時の外気温は、マイナス3度で、朝の読経まで4炷坐り、共生センターに戻って朝食を取りました。再び3炷坐ってから、下村塾長の提唱、塾長の父・山田耕雲老師の著書「禅の正門」に掲載されている「再見性の大歓喜」の節を、濵田副塾長のリードで輪読しました。濵田副塾長は、ちょうど2年前、ハワイ・ホノルルのパロロ禅堂で行った接心の際、見性体験（悟りの体験）をしただけに、耕雲老師の見性体験記を読む声には、迫力と思いがあふれ、皆を感動させました。

昼休みを挟み、終了まで6炷坐り、計16炷の坐禅は脱落者もなく、全員が接心での体験や感想を発表して、無事終えました。

感想発表会で下村塾長は、「コロナ禍、寒さという逆境にもかかわらず、20人弱の塾生が参加してくれました。コロナ感染を防ぐにはちょうどいい人数だったかと思います。逆境は、人間として成長するための修行の場であり、坐禅は祈りでもあります。一日も早く、コロナ禍から回復できるようにという私たちの願いは、世界中に届いた、と思います」と締めくくりました。

参加者の感想は、次の通りです。

外気温はマイナス３度。早朝坐禅で気を引き締める

提唱する下村塾長

月齢15・９の満月が下村邸の枯山水の庭を照らす

● 心の平穏を坐禅で体得しよう

濵田総一郎さん

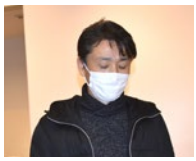
「最高のメンバー、場所、指導者の下での坐禅となり、とても良かった。コロナで大変な人も多いでしょうが、『空』、すなわち本来無一物を感じ、色から見る、空から見るという視点が大事だとあらためて思っています。人には 習気（じっけ）があります。習気とは、考え方や行い、煩悩などによって、心の中に印象づけられた煩悩の気分、習性（ならいしょう）をいいますが、坐禅を続けていると、この習気の悪癖がなくなります。なぜなら、耕雲老師が言っておられる通り、坐禅は人の心の平穏をもたらすからです。これからも坐り続けましょう」

成田仁孝さん

「昨秋の京都・円福寺接心で体験した緊張した空気が、この会場にもあふれています。困難を乗り越え、素晴らしい接心ができて本当に良かったです。経営者として、人間として目指すゴールに、一歩近づいた気持ちです。継続は力なりの言葉にあるように、来年の寒中接心に備えてしっかり坐っていきます」

園部洋士さん

「昨年1年間にたまりにたまった垢、怨念、雑念などを流し去るのが、私にとって慣例となっている寒中接心です。これを経ないと、私にとって新年は来ないも同然なのです。厳しい状況の中での開催でしたが、幹事の皆さんの尽力のお陰で、さらりと今年1年をしっかりやっていけると思います」



氏家範昌さん

「接心終了後の体験発表会場として前回の『あづま館』を予約しようとしたところ、Go Toのため満員と断られ、別の宿を予約したところ、今度は緊急事態宣言に遭い、やむなくキャンセル。食事処も東京方面からのお客さんだからと敬遠され、やむなく弁当、おにぎりなどとなりました。昨年から仕込んでいた新規事業を始めた矢先に、いろんなことが重なりましたが、参加者が19人に減ったおかげで、ゆったりした空間で坐ることができました。坐禅に集中できたことに感謝しています」

高橋宏史さん

「氏家、北川両先輩のお陰で、無事開催できてよかった。何度か福島の接心に参加していますが、この接心が私にとって1年のスタートになっています。コロナを心配しておりましたが、無事に終えられたのは、下村塾長の英断と、塾長が、幹事が、気づかない隙間を埋めてくれたからです。1年の計を立てるために、来年も参加するつもりです」

北川直樹さん

「皆と同じ空間に坐り、あらためていろいろな価値を見出すことができました。リアルに皆さんの考えを聞くことができて、リアルの良さを実感しました。自分は宇宙そのものと聞き、新型コロナもまた宇宙の意思なのだろうと考えています。コロナ禍で、仕事は苦戦しています。このコロナ禍をどうするか。いいも悪いも、ひたすら坐禅をして、解決するしかないと思っています」

オリエンテーションではコロナ対策を説明

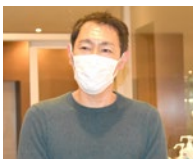
佐藤順英さん

「コロナ禍と寒中という厳しい条件の中、多くの人が参禅できたことに感動しています。心が磨かれたから、免疫力も高まったもの、と思っています」

● この場に来れてよかった

飯島充実さん

「コロナ禍の中で、中止の話も出たが、今回ここに来ることができてよかったと思っています。坐りながら考えたのは、なぜ自分は坐っているのかということです。自分を変えたい、悩みや欲望を振り払いたい。こんな思いが自分を突き動かしていると気づきました。耕雲老師の見性体験を濵田副塾長が読みましたが、見性の感激がよく伝わり、副塾長の禅に対する執念がよく分かりました」



澤井雷太さん

「円福寺に続き、接心の機会を作って下さった塾長や幹事の皆さんに感謝します。一期一会を実感した2日間でした。新幹線から下車した郡山は、初めて訪れた街で、二本松も初めて。背景がみな違う人たちと出会い、ご縁を感じました。坐禅は雑念があふれ、集中できませんでした。感性的な悩みはしない、処理できない悩みは持たないという稲盛さんの言葉を思い出し、これからは優先順位をつけて、課題を解決していくつもりです」

佐々木文雄さん

「神奈川県から今回も参加できてよかった。昨年11月新社屋に移り、会長として煩悩と闘いながら、借金を返していきます。コロナで、私のような医療関係の仕事は多忙になっています。1日も早くコロナ禍を乗り越えていきたい」

常松景子さん

「当たり前のことができない毎日だけに、今回の接心に参加できてよかった。坐禅によって感性的な悩みをしなくなり、一瞬一瞬を大切にする生き方をするようになりました。コロナによって、職場には『うつ』に落ち込む子がおり、接心によって彼らの助けになるのではないかと思って参加しました。これからも、心の高みを目指して坐禅します」

内田裕子さん
「円福寺での接心では、3キロランナーがフルマラソンに出場した気持ち、と発言しました。実は、昨年もこの二本松での接心に参加し、あの時の雰囲気がとってもよかったので、今回も参加しました。ジャーナリストとして皆が抱える課題を解消することが仕事ですが、禅的思考は、仕事の上で、とても役立っていることを学びました。さらに学んでいきたいと思います」

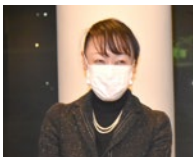
鷹栖春奈さん
「円福寺での接心の際、老師から『呼吸に集中しなさい。その初心を忘れないように』という言葉をいただきました。この教えにしたがって、2日間坐り、最後は足が痛くなりました。雑念に悩まされている毎日ですが、坐り続けていれば、大きな悟りがあると思って、これからも坐禅をします」

園部美智子さん
「初めての接心は、ここ二本松の塾長別邸でした。あの時は、とても足が痛くてたまりませんでした。今回は昨秋の円福寺よりはるかに足は楽になりました。力の抜き方が分かったのかもしれません。塾長は、『坐禅は祈り』と言いましたが、その通りだと思います。世界中の人々が幸せになればいいと思っているので、これからも坐禅を続けたい。また、心を病む人が増えてきている中、心の平穏を果たしてくれる坐禅がもっと広まればいいと思います」

● 皆に会えてよかった

村井和敏さん
「私のアパレル業はコロナの直撃を受けて、過去最低の決算となっています。とても悔しく、昨日1月29日早朝、内房の海岸で、『希望をくれ！　光をくれ！』と大声で叫びました。そんなこともあり、接心の場で皆に会えて清々しい気持ちになりました。坐禅をすると、いつも足が痛くなりますが、今回は腹式呼吸を意識し、雑念をメモしていたら、雑念は吹き飛びました」

狩野刀根男さん
「二本松は初めての地。美しい環境の中での接心を実現させて下さった皆さんに感謝です。私は『心を高める、経営を伸ばす』という稲盛フィロソフィーを座右の銘にしています。円福寺での接心以来、魂をいい形で来世にバトンタッチしたい―これをポリシーにしています。今回のように雪景色が素晴らしいこの様な景色はそうありません。坐禅で『無』になり、高い視点からコロナを見つめれば、コロナがいいビジネスチャンスになるのでは、と考えています」



中川奈美さん
「下村事務所の秘書です。素敵な環境の中で、いい出会いと素敵な体験ができて、ありがとうございます。これを契機に、精進を重ねたいと思っています」

皆川猛
「寒い中の接心でしたが、それがいい空気となりました。皆さんの接心に対する思いを伝えるのが使命だと思っています」